

八 内心の平和か平和の内心か

「宿かさぬ人のつらさを情にて、おぼろ月夜の花の下臥」つれなさが却つてなさけとなる世の中。悲しい事ばかりではない代り、また嬉しい事ばかりに限つたものでもないから、そこは覺悟せねばならぬ。

世の中を思ひまはせば摺鉢の、甘い日もあり辛い日もあり

雨が降れば菓子屋にやつた娘が困らうと氣遣ひ、天氣が續けば傘屋に行つた娘が困らうと氣遣ひ、明暮心配ばかりでは堪らぬ。須らく思かへて、天氣になれば菓子が乾く、傘が出来ると喜び、雨天になれば、傘が賣れる、菓子が賣れると喜ぶがよい。

藤の花だからとて、いつもぶら下つてゐると云ふ譯でもない。試みに池の岸に立つて水中を見よ。「藤の花水に映ればぶらあがり」それぶら上つて見えるであらう。今少し叮嚀に云へば、「藤棚の水に映りし花の影、下より上に下るものかな」。それ下より上に下ることも出来る。日本三景の一たる天の橋立は、船で松林を一周したのでは、其の眞景が眼に入らぬ。對岸の成相山に登つて眼下に眺むる時、全景を一眸に集め得て、絶景謂はん方もない。けれど之も直立して眺めたのでは平凡である。股眼鏡をかける。即ち天橋に背を向けて立ち、腰を屈めて我股より下へ顔を出して、逆に天橋を遠望した處で、眞に天下の絶景が我物となりますのであります。

人も高い所に我身を置いて、直立して人生を眺めたら、何となく不足を感じるが、我身を屈して人生を大觀する時、見る物聞く物悉く愉快である。人の世は浴槽のやうで、全身を没して頸まで湯の届くやうな深い浴槽はない。若し人がその中に直立して湯の不足を訴へるなら、忽ち湯屋の三助に笑はれるであらう。故に私共は我身を屈して人生の浴槽に入れば、湯の多少に拘

らず全身を温めることが出来る。天の橋立も腰を屈め股眼鏡で見て、一段の妙があり。藤の花も池の上を見ず、池の底を眺めて、一層の面白さを感じる。茲が人生だ。

朝夕佛壇の中に暮してゐるからには、嘸満足であらうと思へば、さうでなく、五具足共各不平を洩らしたさうな。最初眞中の香爐が申すには

磨かれて光らうとすれど朝夕の、香の煙に咽ぶづゝなさ

さぞ煙いことであらう。すると隣の燭臺が

燭臺の鶴にはなるな蠟燭の、いつも火糞で頭焼かるゝ

「皆偉い熱さうなが俺にもある」と、云ひ出したのが其隣の花瓶。

草と木と花と水とに宿貸して、家賃もとらず冬の冷たさ

「君等何を云つて居る、僕にかつて不平はあるよ、まあ僕の姿を見て呉れ」と云ふのは、その側にぶら下つて居る輪燈。

ぶらぐと腰の定まらぬ浮世哉、地震のゆらぬ國へ行きたい

土臺から動いては叶はぬでないか、熱い冷い位の騒ぎではないよ。「何を云つて居る、僕の方がまだ酷いよ」と、オンく泣き出したのは磬である。而して云ふには、

初手二つ中の二つはさもなくて、安樂國の三つの痛さよ

言へば云ひたい事は幾らでもある世の中。人毎に一の苦は持たねばならぬ筈。「我が物と思へば輕し笠の雪」、痛い苦しいも覺悟してからは、そんなでもないもの。叩かれるのを嫌つては磬になれず、ぶら下つて居ないでは輪燈でない。苟くも人間ならば、渡られぬ人生の橋も渡つて見ねばならぬ。愚圖々々不平をならべ、苦情を云ふのは、人として當を得たものでない。「世の中は人の上のみゆかしけれ、羨む吾も羨まれつゝ」。「不足なく思へば不足なき

ものを、不足をたてゝ不足する人。

明の税世祿は曰く「世界は原と自ら缺陷あり、人心は原と自ら圓満なり、吾人は常に圓満の人心を以て、缺陷の世界を圓満にすべし、當に缺陷の世界を以て、圓満の人心を缺陷にすべからず」と、味あるかな言や。私共は是非とも信仰に依れる圓満な心で、缺陷の世界を圓満にしつゝ、現在の清福清暢を喜ぶのです。眞に笑ふ人となるのです。